

## ちょっとした国際交流

私が大学生の時のことです。

私は下宿生活を送っていたのですが、ある日、私の隣の部屋に、一人の外国人女性が引っ越してきました。なんとなく挨拶を交わすうちに、彼女が来日して中学校で英語を教えているということがわかりました。彼女とは同性で年齢も近いこともあり、時々部屋を行き来しては、英語と日本語の両方を交えて話すようになりました。

季節が春から初夏に向かうころ、連休を利用していっしょに私の実家に行き、ゆっくりと過ごそうということになりました。私の実家は、四方を山々で囲まれた、谷間の小さな村にありました。

新緑の木々が映える村に着いた時、彼女が言いました。

「なんて美しいの！私、こんなに静かで空気がすがすがしいところに来たのは初めてよ。すばらしい！」

その夜、隣に住む70代のご夫婦が、「お客さんに食べてもらって。」と、畑で採れた野菜の天ぷらとイワナの塩焼きを持ってきてくれました。その場で一口食べた彼女は、料理のおいしさにも驚いていましたが、何より、初めて出会う見ず知らずの自分に対する心遣いにとっても感動していました。

「Thank you so much.」と微笑む彼女に、そのご夫婦も「喜んでもらえたらうれしいわ。」と笑顔になりました。

次の日、彼女と私は、自転車に乗って村を見て回りました。すると、出会う人たちが「こんにちは。」「どこまで行くの？」と声をかけてきてくれました。大人だけでなく、子どもたちも、ちょっとはにかみながらも、「Hello！」と手を振り、彼女が「Hi！」と答えると、「やった！」と喜んでいました。また、子どもたちとは川遊びをし、近くのおばあさんには、私も知らないようなこの村の昔の様子を聞かせてもらったりもしました。

日本語と英語、そしてジェスチャーで、お互いに、教えたことや気持ちを伝え合いました。

時間はあっという間に過ぎ、私たちはまた下宿先のまちへと戻ることになりました。帰り際に母が彼女と私に言いました。

「今回の帰省は、この小さな村にとって、なんだか、ミニ国際交流会みたいになったね。みんなも楽しそうにしてたよ。国や言葉はちがっても、伝えたいという気持ちと、分かり合いたいという思いがあれば、必ず相手のことを理解できるんだと改めて思ったわ。ありがとうね。また来てね。」

彼女も母と私に言いました。

「今回の体験を、子どもたちに話そうと思います。言葉の使い方や話す時の技術と同時に、相手に自分の思いを伝えることの楽しさや喜びを教えたいと思っています。」

彼女にとっても、小さな村の人たちにとっても、そして私にとっても、忘れられない初夏の休日となりました。